

【地域教育実践報告】

ゼミナール活動における体験型地域学習とその成果

——村越ゼミの小川町歴史名所めぐりを通して——

村越純子*

1. はじめに

城西大学・城西短期大学地域連携センターは、本学における地域連携推進の活動拠点である。同センターはつぎの4つを目的としている。①大学での「学び」を通じた「地域」に貢献し得る能力と人間性を合わせ持つ人材の育成、②大学の「教育・研究」を通じた「地域」の実際的な課題の解決、③地域連携及び地域資源を活用した「教育・研究プログラム」の実施、④世界のどこにいても「地域」に対する意識を持って生きていく「地域志向」と「国際性」との融合の4つである¹。同センターは、地域連携に関する活動成果の発表の場として、2022年度から学生による「地域連携活動発表会」を用意している。発表会は城西大学の学園祭「高麗祭」期間中に、地域交流の拠点「JOSAI HUB」において開催されている。

ところで、筆者はゼミナール教育に地域連携を視野に入れた学外授業を取り入れ、2022年度に「龍峰山清泉寺における学外授業」²、2024年度に「川越歴史文化遺産巡り」³、2025年度には「小川町歴史名所めぐり」⁴を実施し、それぞれの成果を「地域連携活動発表会」で発表してきた⁵。本稿では、「村越ゼミナール」の学外授業を事例に挙げ、短期大学の教育目的を具現化させたゼミナール活動の有効性を確認することが目的である。以下、第2節では城西短期大学のディプロマ・ポリシーにある「人間力」（「社会人基礎力」）の向上と、それを主として担う2年間をとおした「ゼミナール」活動の特徴を述べる。第3節では、2025年度に「村越ゼミナール」の2年生が学外授業として取り組んだ小川町における体験型地域学習について紹介する。第4節では、地域学習の成果を、地域連携活動発表会でわかりやすく伝える活動を紹介する。そして受講生の振り返りレポートにみられる学生自身による

* 城西短期大学ビジネス総合学科准教授

- 1 城西大学・城西短期大学地域連携センター「地域との連携で目指すもの」(<https://www.josai.ac.jp/lifelong/cooperation/>) (2025年12月25日)による。
- 2 2022年度の地域連携活動発表会で使用した「龍峰山清泉寺における学外授業」のパネルについては、城西大学機関リポジトリJURA (https://libir.josai.ac.jp/il/meta_pub/G0000284repository_JOS-Presen20221104-11)において閲覧できる。
- 3 2024年度の地域連携活動発表会で使用した「川越歴史文化遺産巡り」のパネルについては、城西大学機関リポジトリJURA (https://libir.josai.ac.jp/il/meta_pub/G0000284repository_JOS-Presen20241103-16)において閲覧できる。
- 4 2025年度の地域連携活動発表会で使用した「小川町歴史名所めぐり」のパネルについては、城西大学機関リポジトリJURA (https://libir.josai.ac.jp/il/meta_pub/G0000284repository_JOS-Presen20251102-9)において閲覧できる。
- 5 2023年度の村越ゼミナール（1・2年生による）は、城西大学第56回高麗祭において、SDGsに関するクイズイベントを実施した。実施したイベントは、「父母後援会長賞」を受賞した。

「人間力」(「社会人基礎力」)に関する気づきを確認する。さらに城西短期大学が入学直後と卒業前に実施した社会人基礎力テストの診断結果を比較検討し、「ゼミナール」活動は「人間力」のうち、とくに「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」や「状況把握力」の向上に役立ったと考えられることを示す。最後に本稿をまとめ、大学教育における1・2年次のゼミナールの役割について展望する。

2. 城西短期大学の「ゼミナール」の位置づけとその特徴

2.1 「人間力」向上のためのゼミナール

城西短期大学ビジネス総合学科は、「社会人基礎力」(Essential competencies)を構成する「前に踏み出す力(Action)」、「考え抜く力(Thinking)」、「チームで働く力(Team Work)」の3つの力をバランスよく向上させることをめざしている⁶。具体的に説明するとつぎのとおりである。ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)では、「自立した社会人として求められる人間力」を身につけた成果を「基本的学習成果」と呼び、「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」の習得結果を「専門的学習成果」と定めている⁷。「基本的学習成果」としての「人間力」は「①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力」から構成されると説明されており、これはまさしく「社会人基礎力」のことである。本学では、「社会人基礎力」の向上を中核的な目標とし、職業人としての専門的能力を高めていくことがめざされている。

上述のディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)を踏まえて作成されたカリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)では、「基本科目」、「専門科目」、「関連科目」が配置されている。「基本科目」は、「「人間力」を養成する基礎ゼミナール、ゼミナール、職業人としての基礎知識を学ぶ経営学基礎、コミュニケーション基礎英語」などから構成されている⁸。それらのうち、とくに、1年生対象の「基礎ゼミナール」と2年生対象の「ゼミナール」では、「人間力」すなわち「社会人基礎力」を高めることがめざされている。

このようなポリシーに基づいて実施されてきた城西短期大学の教育内容は、2023年度における短期大学基準協会の審査で「評価の結果、自らの掲げる教育理念の実現及び教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を満たしていると判断」された。この事由が、

6 「社会人基礎力」(Essential competencies)とは、経済産業省が2006年に「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として提唱したキャリア教育の指針である。「社会人基礎力」は2017年に「人生100年時代の社会人基礎力」(Essential competencies for the 100-year life)と定義しなおされ、「学び(何を学ぶか)」、「統合(どのように学ぶか)」、「目的(学んだ後に、どのように活躍するか)」という3つの視点が追加された。そして、能力間のバランスを図ることが、自らのキャリアを切りひらいていく上で重要とされた。経済産業省「社会人基礎力」(<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>)、および、経済産業省中小企業庁(2018)を参照。

7 城西短期大学(2021), pp.74-75による。城西短期大学のディプロマ・ポリシーはつぎの3つである。①広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力、②社会人として適切にふるまうことができる思考力、判断力、表現力や道徳的能力、③社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力の3つである。

8 「城西短期大学教育方針(三つのポリシーと学習成果)」は(https://www.josai.ac.jp/media/JBC_12_binran2024-1.pdf) (2025年12月25日)で確認できる。

「総評」の冒頭部分で以下のように説明されている。

「建学の精神は「学問による人間形成」であり、この建学の精神の下、短期大学の教育理念を「豊かな人間性と社会性を兼ね備え、地域社会に貢献できる人材」の育成としている。教育理念の「地域社会に貢献できる人材の育成」から地域貢献を目標の1つに掲げ、近隣自治体や他大学との連携にも積極的に取り組んでいる。さらに、地域連携の授業科目を開講し、地域の課題解決に取り組む学外活動を積極的に取り入れ、地域貢献を通して学習成果の獲得につなげている。」⁹

そして「特に優れた試みと評価できる事項」に、「教育課程と学生支援」が挙げられ、以下のように説明されている。「前に踏み出す力」、「考える力」、「協力する力」という質的で測定しにくい卒業認定・学位授与の方針の「基本的学習成果」（人間力）の内容を「社会人基礎力テスト」などを使って数値化し、ゼミナール担当教員がそれぞれその数値を使いながら「基本的学習成果」の達成のために具体的で適切な学生指導を行っている¹⁰。このように評価された城西短期大学のゼミナール教育のうち、2.2では筆者が担当している「ゼミナール」の2024年度から2025年度までの2年間の成果を紹介する。

2.2 村越ゼミナールの2年間

上述のとおり、1、2年次それぞれに配置されている「ゼミナール」科目は城西短期大学ビジネス総合学科がめざす「自立した社会人として求められる人間力」つまり「社会人基礎力」の向上を主たる目的としている。村越ゼミナールでは、「社会人基礎力」の向上をめざして2年間のプログラムを以下のように位置づけてきた¹¹。1年次前期の「基礎ゼミナールA」では自己肯定感を高めるとともに、自らの感性や理性を言語化できるようにすることをとおして「前に踏み出す力（Action）」を養うことをめざす。より「主体性」を持てるようになり、養われる「働きかけ力」と「実行力」を前提として1年次後期の「基礎ゼミナールB」では、課題解決のために「考え抜く力（Thinking）」の向上をめざす。2年次前期の「ゼミナールA」では1年次に獲得あるいは向上させた力を前提として、「チームで働く力（Team Work）」を高め、2年次後期の「ゼミナールB」では、それまでに高めた「前に踏み出す力」、「考え抜く力」と「チームで働く力」の3つの能力による総合的実践を行う。このような位置づけである。

2024年度前期開講の「基礎ゼミナールA」の内容はつぎのとおりである。諸富祥彦著『「働く意味」がわからない君へービクトール・フランクルが教えてくれる大切なこと』（日本実業出版社、2014年）をテキストとして使用した。同書は全48のトピックから構成されており、各トピックでは生き方についての悩みや疑問に対して、著者である諸富氏が、『夜と霧』を執筆した心理学者のビクトール・フランクルの考え方を紹介しながら回答するという形式がとられている。受講者はまず関心のあつトピックを2つ選択する。Q&A形式で2頁から4頁にまとめられている各トピックは、受講生にとって身近な話題が多い。選択したトピックの内容を要約したうえで、トピックに関連付けて受講生

9 一般財団法人大学・短期大学基準協会（2024），p. 1.

10 一般財団法人大学・短期大学基準協会（2024），p. 3.

11 村越ゼミナールの2020年度から2021年度までの活動内容およびゼミ生の「社会人基礎力」の向上については、村越（2021b）および、村越（2022）を参照。

が自分の体験・経験を振り返る。さらに、その結果を、ゼミ生みずからが発表し他方、発表者以外は必ず発表内容に前向きなコメントをすることを求めた。そうすることでゼミ生自身はこれまでの体験・経験に基づいて自己肯定感をより高めることができ、その結果「前に踏み出す力 (Action)」を向上させることができると考えたからである。各自の発表時間は20分程度、聴覚資料である読み原稿 (MS-Word形式) については1分200字で話す想定として4000字以上を作文すること、視覚資料であるプレゼンテーション原稿 (MS-PowerPoint形式) についてはスライド18枚以上を作成することとした。村越ゼミナール2024年度1年生全員がこの課題に取り組み、6月半ばに終了した。

「基礎ゼミナールA」受講の1年生は2年生の学外授業「川越歴史文化遺産巡り」(2024年6月5日実施)に参加した。それを前提に「基礎ゼミナールA」後半では、2年生を主体とする2024年度の地域連携活動発表会にむけたパネル作り及び報告資料作りに1年生が参加した。さらに夏休み中には1・2年生合同のグループワークを水田記念図書館内のグループ学習室で実施した。パネルづくりに参加することによって、「基礎ゼミナールB」で目指す「考え抜く力 (Thinking)」の向上が期待されると考えたからである。

「基礎ゼミナールB」の授業がはじまってからも、秋の「地域連携活動発表会」の準備作業を続けた。結果的に、「基礎ゼミナールB」の活動全体の振り返りにおいては、1年生の多くが地域連携活動発表会に参加したことを自分の成長の機会としてとらえていた。そこで2025年度の2年次「ゼミナールA」および「ゼミナールB」においても、地域連携活動発表会への参加をひとつの目標に設定し、「社会人基礎力」のなかでとくに「チームで働く力 (Team Work)」の向上をめざした。

2025年度の「ゼミナールA」では学外授業先として、教員(村越)が小川町を提案し、ゼミ生から合意を得て実施された。実施に至る経緯とその内容については第3節で詳述する。

3. 小川町における体験型地域学習

3.1 学外授業実施の経緯

筆者が担当している授業科目「日本文化研修」では、2017年度から小川町にぎわい創出課の協力を得て小川町での学外授業を実施してきた¹²。人的なつながりから、2025年度の「ゼミナールA」における学外授業についても、まず小川町にぎわい創出課の横山万友氏に相談した。ゼミナール受講生が8人であることを伝えたところ、同氏から午前の「紙漉き体験」と午後の「町歩き」が提案された。提案された具体的な内容は表3.1に示されている。表3.1にある「道の駅おがわまち」とは埼玉伝統工芸会館が2025年5月末にリニューアルオープンされた施設のことである¹³。「観光案内員」とは、小川町観光協会が実施している「おがわまちなか散歩ツアー」における観光案内ボランティアのこと

12 村越(2021a)を参照。とくに保田義治氏(元小川町職員・細川紙技術者協会事務局)には、埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)公開講座実施についてもお世話になった。同氏の協力を得て2023年9月29日には「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る2023「埼玉のスゴ偉人」-小川和紙を支える人々」と題するシンポジウムを実現させた。同氏退職後には、引き続き、小川町にぎわい創出課地域振興グループの横山万友氏にお願いした。2025年度に小川町における学外授業を提案した背景にはこのような経緯がある。

13 小川町「道の駅おがわまち」(<https://michinoeki-ogawamachi.com/>) (2025年12月25日)を参照。

である。

定例教授会（2025年6月13日実施）において、表3.1をもとに、2025年度の村越ゼミナールは秋の「高麗祭」で実施される「地域連携活動発表会」において成果報告をめざしていることを説明し、小川町における学外授業実施の承認を得た。

表3.1 小川町にぎわい創出課による提案内容

城西短期大学受入体制について	令和7年6月11日
期日 令和7年6月21日（土）	
時間 10：00～16：30	
人数 学生8名、教員1名	
★当日の流れ	
～10：00 道の駅到着	※混雑が予想されますので時間に余裕をもってお越しください。
10：00～11：00 紙漉き体験（流し模様）	
11：00～13：00 道の駅散策（昼食含む）	※当日は混雑が予想されます。 (かなりの時間並ぶことが予想されます。時間に余裕をもって昼食をとってください。)
13：00～13：30 小川町駅へ移動	
13：30～16：30 ボランティアガイドによる町歩き	※当日担当ガイド佐久間さんがお待ちしています。
16：30～	終了
★費用	
体験 紙漉き体験（流し模様）：1,320円×人数分	
※道の駅は基本郵送でのお渡しになっています。	
★町歩きルート	
観光案内所むすびめ →大谷石の石蔵 →三峯神社 →私立小川町病院と教会 →聖徳太子碑 →小川町和紙体験学習センター →庚申塔 →玉成舎 →ヤオコー創業地 →福助 →秩父往還 →南裏通り →栃本親水公園 →栃本堰と小川用水 →中城跡 →半僧坊と羅漢様 →仙覚律師顕彰碑 →晴雲酒造 →比企銀行 →しまむら創業地と萬屋旅館 →北裏と蔵 →二葉本店 →観光案内所むすびめ	
担当：小川町 にぎわい創出課 地域振興グループ 横山万友	

3.2 学外授業の内容

2025年6月21日（土）の学外授業にはゼミ生8人中7人が参加した。1名の不参加は就職内定先企業が指定した研修日と重なったからである。9時にゼミ生が小川町駅に集合し、バスで「道の駅おが

わまち」まで移動した。「道の駅おがわまち」の伝統工芸施設で「紙漉き体験」をした。そして和紙の製造工程や和紙の歴史を学べる展示室を見学した。その後、「道の駅おがわまち」館内にある「里山ごはん食堂」で昼食後、バスで小川町駅まで戻った。13時から小川町観光案内所「むすびめ」で小川町観光案内員の佐久間登知行・山本高志の両氏と合流した。両氏は、小川町の史跡や名所の写真とそれらに関する手作りカードを用いたわかりやすいガイドにより、当初の計画どおりに小川町の名所を巡った。午前、午後の体験のなかでゼミ生は各自が関心をもった場所や風景の写真撮影にも取り組んだ。「紙漉き体験」の写真は、双六パネルに活かされている（地域連携活動発表会で使用したパネル内の写真②参照）。

4. 学外授業後の地域学習

4.1 双六パネルづくりと報告用読み原稿の作成

地域連携活動発表会にむけて準備をはじめたのは、学外授業を終えた後の2025年7月4日からである¹⁴。それぞれが分担を決めて準備のための「活動記録」(MS-Word形式)をMicrosoft Teamsというプラットフォーム上のクラス「村越ゼミナール」に作成し、ゼミ生で共有することにした。夏休み期間中の8月6日と9月2日の2日間は、短期大学棟内の教室で準備作業を行った。その2回分の「活動記録」は表4.1に示されている。

具体的な作業はつぎのとおりである。ゼミ生はまず学外授業先の小川町で撮影した写真データを、Teamsクラス「村越ゼミナール」で共有したうえで、話し合いを重ね、パネルに用いる写真として最終的に24枚を選択した。そして、学外授業の最後に観光案内人の佐久間登知行氏から贈られた水彩画の複写3枚もパネルに加えた。パネルの「道の駅おがわまち」という文字の背景には、ゼミ生が実際に「道の駅おがわまち」館内で漉いた模様入り和紙作品を取り入れた。そして双六ゲームのために、小川町の名所の特徴を説明するクイズ問題20題とその解答の選択肢、わかりやすい解説文を作成した。その過程では、インターネットを用いて小川町の名所、歴史や文化に関する情報を収集し、情報の信頼性を確認する作業を行った。

9月のゼミナール活動においても、双六パネルの写真に関連したクイズ問題とその解答についての解説文を更新し続け、双六パネルを完成させた¹⁵。10月24日と10月31日のゼミナールでは、23号館のJOSAI HUBに展示されたパネルの前で、当日のゲーム参加者を想定した発表練習に取り組んだ。発表前日まで読み原稿の推敲を重ね、当日を迎えた。各自が使用した報告用の読み原稿は付録1のとおり

14 当時のゼミ生8人を進路志望別にみると、就職3人、城西大学編入3人、専門学校等進学2人であったため、各自のキャリア形成に役立つような報告課題を設定し、それぞれ1人50分程度の発表を行った。報告タイトルは、「僕が目指す農業について」、「ステージ衣装創作の魅力」、「信用金庫の魅力」、「事務職の魅力」、「アパレル業界の魅力」、「文献紹介：友村晋『生成AIに仕事を奪われないために読む本』」、「文献紹介：永松茂久『人は話し方が9割』」、「文献紹介：蟹江憲史『SDGs（持続可能な開発目標）』」などである。

15 双六パネルは城西大学機関リポジトリJURAにおいてPDFデータとして閲覧およびダウンロードが可能である（城西大学機関リポジトリJURA「小川町歴史名所めぐり」(https://libir.josai.ac.jp/il/meta_pub/G0000284repository JOS-Presen20251102-9)）。

りである¹⁶。この付録1に示された発表原稿は、ゼミ生自身による地域学習の成果といえる。

表4.1 村越ゼミナールの2025年8月6日および9月2日における活動記録

<p>活動日時：2025年8月6日（金）9：30～17：30 活動場所：13-202教室 参加者：赤塚、秋山（舜）、秋山、伊林、尾上、笠原、金子、木戸口 記録記載日：8月6日（水） 文責：伊林</p> <p>活動内容（議事）</p> <p>（1）個人活動 各々がクイズの問題、解答、解説を作成した。クイズ問題は休み中にそれぞれが作成してきたものである。</p> <p>（2）パネル写真選定 晴雲酒造の写真については煙突のみorお店全体写真の二つのうち、全体写真に決定した。 写真は、笠原撮影34を採用した。</p> <p>（3）題名付け パネルで使用する写真に題名を付けた。話し合いのうえ、下記のように決定した。 1. 小川町駅、2. 紙漉き体験、3. 体験プログラム、4. 和紙を使った雛人形、5. 和紙のふるさと、6. みたらしソフトクリーム、7. 和紙体験学習センター、8. 和紙の折り鶴、9. 楮の原木と作業場、10. 大谷石の石蔵、11. 庚申塔、12. 槻川、13. 晴雲酒造外観、14. 帳簿台、15. 中城跡・櫓、16. 羅漢、17. 仙覚律師顕彰碑、18. 顕彰碑を見る様子、19. 万葉集、20. 蛙を持った羅漢像、21. 比企銀行、22. ヤオコー創業当時のイラスト、23. しまむら創業当時のイラスト、24. しまむら創業地の現在の様子、25. 二葉楼看板、26. 二葉本店のイラスト、27. むすびめ</p> <p>（4）問題・解説文の読み合わせ 各自が担当したクイズの問題・解答・解説を読み上げ、ズレやダブリ、読み方について確認しあった。 （とくに解説文の漢字の読み方を調べて、ルビを振った）</p> <p>（5）課題点 紙漉き体験に関するクイズ問題を一問追加する。 紙漉き体験以外のクイズ問題については様子をみってから追加する。</p> <p>（6）今後のスケジュール 9月2日（火）9時半から 2コマ分程度</p>

16 地域連携活動発表会当日にゼミ生が用いた原稿は、A4サイズで14頁にわたるものであり、発表する際に読みやすいよう、文字を大きくし、とても見やすいレイアウトになっている。付録1では紙面の関係上、文字を縮小してルビを削除するなど、レイアウトが変更されている。

活動日時：2025年9月2日（火）9：30～12：50

活動場所：13-202教室

参加者：秋山（舜）、秋山、伊林、尾上、笠原、金子、木戸口

記録記載日：9月2日（火）文責：笠原

活動内容（議事）

（1）個人活動

各々、クイズの問題、解答、解説文について添削と確認をした。

（2）パネルのデザイン設定

秋山（舜）が双六のマスの色の変更と数字の追加を行った。

表題「道の駅おがわまち」の背景のデザインは伊林の和紙作品を採用した。

双六のマスの中にある「小川町双六」のフォントサイズを250に拡大した。

秋山（舜）、金子、木戸口の3名が双六のマスの更新をした。

2024年度作成パネルの双六の数字は1から5までの繰り返しであったが、今年度のパネルではクイズ問題の番号と整合性がある数字にすることにした。

パネルの1～5のマスについては、背景黄色・数字も黄色とし、より写真が引き立つようにした。そしてパネルの右上には、解説文作成で参照した出典を記載した。

（3）「小川町歴史名所めぐり」の読み原稿

各自が作成した解説文をみなで確認し、説明の追加や添削によって、パネルの写真と読み原稿を紐づけた。パネルの写真の番号の振り付けについては木戸口と金子が更新した。

晴雲酒造の外観と帳簿台の写真については金子と笠原が確認した。すべての写真の説明については木戸口を中心に確認作業が進められた。

（4）課題点

マスの数字は番号順にしたほうがスムーズにできるのか。

昨年度の地域連携活動発表会では付箋を使用して双六のマスを進めていたが、今年度は磁石で進めた方が良いのではないか。

（5）今後のスケジュール

10月3日（金）2限目

村越先生が読み原稿を印刷してくれるため、読み合わせをしてプレゼンを行う。

4.2 発表内容とその評価

2025年11月2日に実施された地域連携活動発表会では、ゼミ生が2人組になって「小川町歴史名所めぐり」と題したクイズ形式での発表を行った。その様子が図4.1「ゼミ生による発表の様子」に写っている。左端の学生が抱えている白いボックスには双六をしてもらうための大きなサイコロが入っている。立ち寄られた学長と発表を担当したゼミ生による記念写真が図4.2「発表を見学の藤野

陽三学長とゼミ生」である。学長が手にしているのは参加者への配布用に用意した双六パネルの縮小版である。

図4.1 ゼミ生による発表の様子



図4.2 発表を見学の藤野陽三学長とゼミ生



地域連携センターは、地域連携活動発表会への参加者に対して各パネルの視聴後にアンケートを実施した。アンケート結果のなかで、「印象に残った・良かった発表」として挙げられた「小川町歴所名所めぐり」の選択理由（自由記述部分）が表4.2に示されている。ゲーム参加者の多くが、ゼミ生の発表を高く評価していることが分かる。ゼミ生のリフレクションに活かせるように、このアンケート結果については地域連携センターから開示後、早速、ゼミ生とTeams「村越ゼミナール」上で

共有した。

表4.2 村越ゼミナール「小川町歴史名所めぐり」に対するアンケートの自由記述

- ・クイズ形式にすることで小川町の文化に引き込まれた。準備期間がとても長く濃い発表だったことが資料や発表でもとても伝わってきた。小川町に行ってみたいと思いました。
- ・サイコロの形式の誰でもやりやすい方法をとっていてよかったと思いました。発表の方々も明るく元気にやっていたのでとても楽しめました。クイズも2択で考えればわかるものが多く達成感のあるものでよかったです。
- ・小川町という地味な地域をターゲットにさせていただき小川町を知る私からお礼を言いたい。
- ・すごろくとクイズ形式で小川町を紹介するアイデアは素晴らしいと思いました！小川町散歩に出かけようと思います。
- ・すごろくが楽しく体験できました。また問題も良く、こちらも勉強になりました。
- ・説明がとてもわかりやすく、内容もよく考えられていて、楽しく勉強になりました！
- ・クイズの創作に努力のあとがある。
- ・よく調べてあり勉強になりました。
- ・小川町を良く知らなかったけどよくわかりました。小川町に行きたくなりました！
- ・参加型での発表で楽しかったです。小川町のことをより広く知ることができました。
- ・パネル、解説、資料、学生が堂々と発表している等、本当に素晴らしいの一言です。双六にして来場者を飽きさせない工夫もよくできています。小川町のことたくさん勉強させてもらいました。

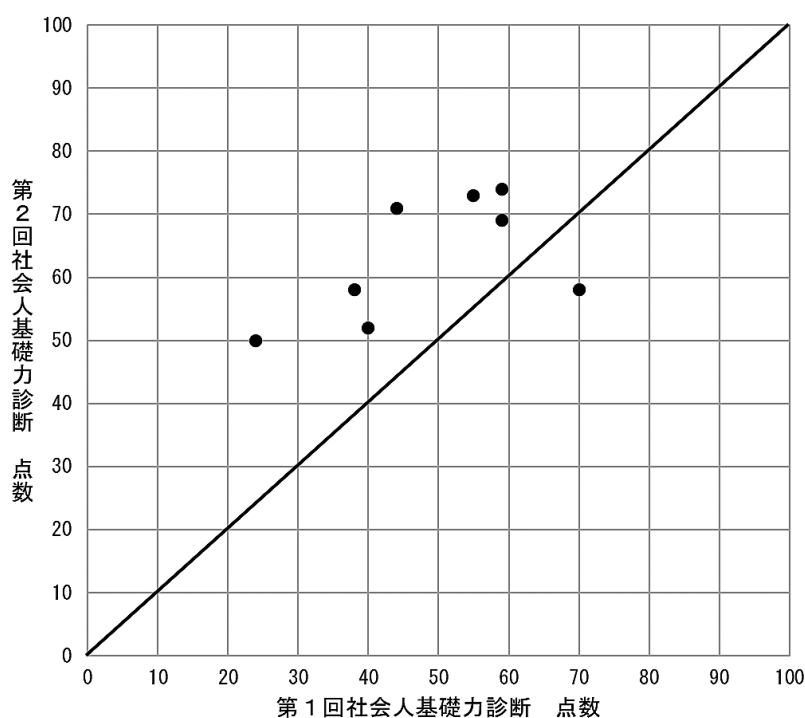
4.3 地域連携活動発表会後のリフレクション

地域連携活動発表会後のリフレクションとして、ゼミ生に対してつぎの課題を出した。「地域連携活動発表会にむけた村越ゼミナールの活動をとおして、①自分が特にながらぶた活動、②自分が成長したと思えること、③反省を踏まえた自分にとっての今後の課題、について600字以上の原稿（MS-Word形式）にまとめること」である。この課題をテーマにゼミナールで発表した者のうち、公開に同意した5人の報告原稿が付録2に示されている。そこでは、ゼミ生自身が自らの体験や行動を振り返ることで気づいたことが詳しく述べられている。「地域連携活動発表会」という日頃の学習成果を発表する機会があったことで、学生は「達成感」や「やりがい」をより一層感じることでできたことが分かる。そして自己分析によって自己理解を深めるさいに、「社会人基礎力」の12の能力要素を手がかりにしていることも確認できる。12の能力要素とは、「前に踏み出す力（Action）」に含まれる「主体性」・「働きかけ力」・「実行力」の3つ、「考え抜く力（Thinking）」に含まれる「課題発見力」・「計画力」・「創造力」の3つ、そして「チームで働く力（Team Work）」に含まれる「発信力」・「傾聴力」・「柔軟性」・「状況把握力」・「規律性」・「ストレスコントロール力」の6つである。

城西短期大学では、2024年5月に1回目の社会人基礎力テスト（日経Human Resources（HR）、

「社会人基礎力診断S」を実施し、2025年12月に2回目の社会人基礎力テストを実施した。1回目の診断結果と2回目の診断結果を比較検討したところ、ゼミ生の「社会人基礎力」の3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）のなかで、とくに「チームで働く力」の点数の上昇が確認された。社会人基礎力診断の「チームで働く力」の得点変化については図4.3に示されている。これはゼミ生8人の得点の変化を散布図により示したものである。グラフの横軸が1年次の「基礎ゼミナールA」で実施した「第1回社会人基礎力診断」の点数、縦軸が2年次の「ゼミナールB」で実施した「第2回社会人基礎力診断」の点数である。したがって、おおよそ入学時から卒業時までの学習成果をみることになる。45度線よりも左側にあるデータ（黒丸マーカー）は第1回の点数より第2回の点数の方が高いことを示す。「チームで働く力」は、ゼミ生8人中7人の点数が10点上昇していることが分かる。

図4.3 社会人基礎力「チームで働く力」の散布図



「チームで働く力」は6つの能力要素（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）に分けられる。この6つの能力要素のなかで、とくに数値の上昇が確認できたのは「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」という4つの要素である。「発信力」の点数変化については図4.4、「傾聴力」については図4.5、「柔軟性」については図4.6に、「状況把握力」については図4.7に示されている。図4.4、図4.5、図4.6、図4.7のなかで45度線よりも左側にあるデータ（黒丸マーカー）は第1回の点数より第2回の点数の方が高いことを示すことは図4.3と同じである。「発信力」については、半数以上の4人の点数が上昇している。「傾聴力」については、7人の点数が上昇している。「柔軟性」についても、7人が上昇し、そのうち2人の点数は30点以上も上昇している。「状況把握力」については、7人が上昇し、そのうち5人の点数は30点以

上も上昇している。

これらの分析結果から、ゼミ生が自身の体験を振り返ることによって得た成長の実感は客観的に把握できるものといえる。

図4.4 社会人基礎力「発信力」の散布図

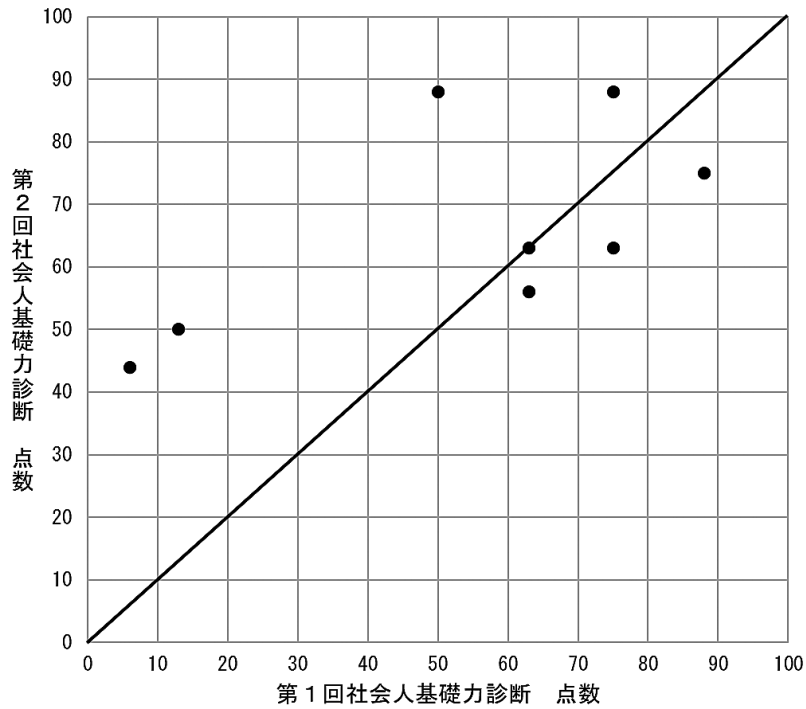


図4.5 社会人基礎力「傾聴力」の散布図

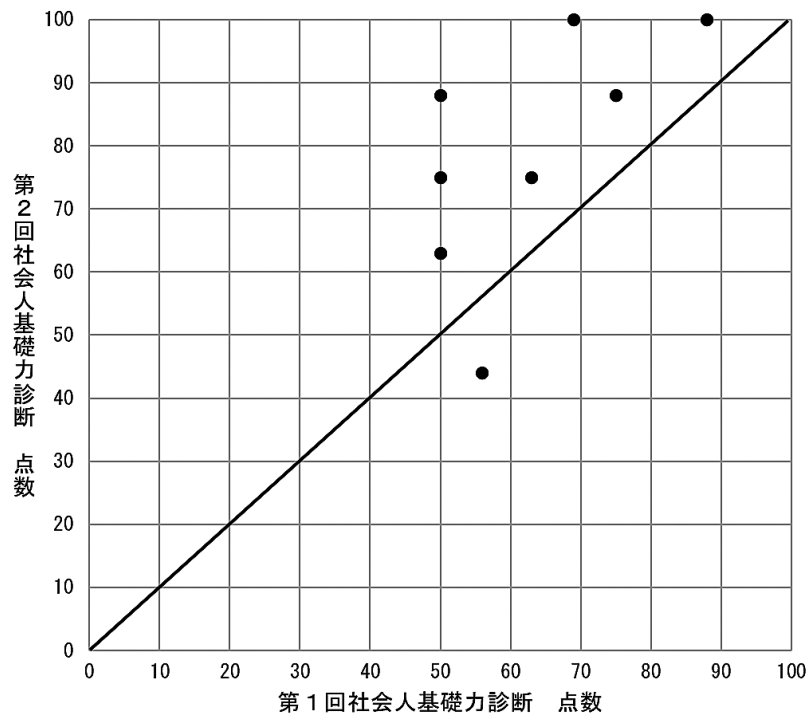


図4.6 社会人基礎力「柔軟性」の散布図

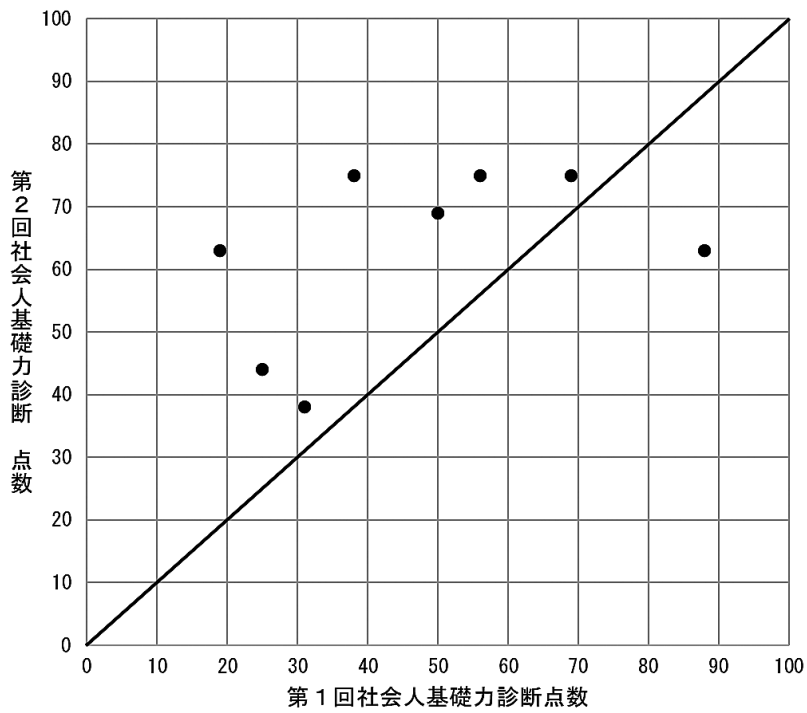
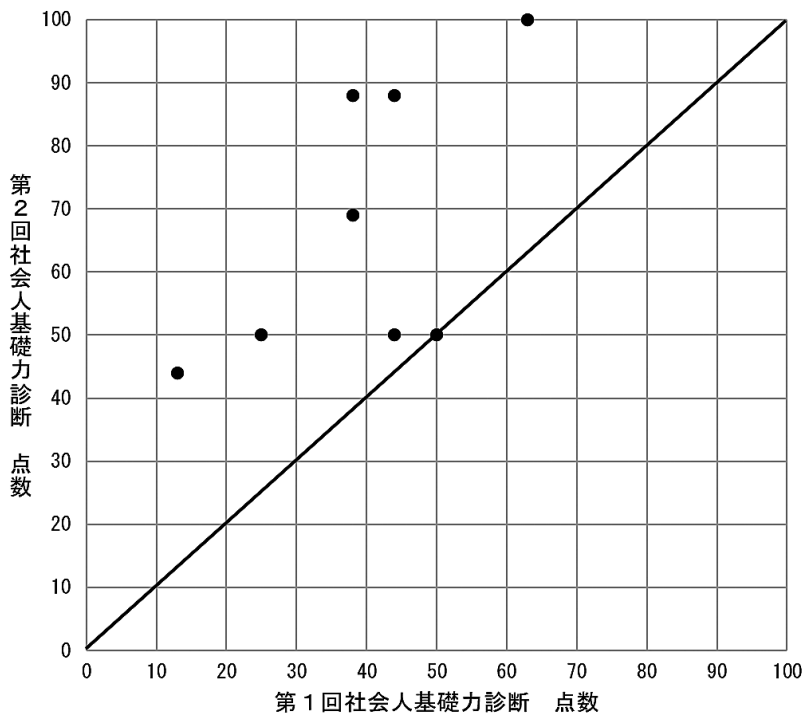


図4.7 社会人基礎力「状況把握力」の散布図



5. おわりに

本稿では、「人間力」（「社会人基礎力」）の向上をめざす城西短期大学において、2025年度に「村越ゼミナール」で実施された体験型地域学習を紹介した。具体的にはつぎのとおりである。城西大学・城西短期大学地域連携センターが主催する地域連携活動発表会における報告を、ゼミナールの活動の最終目標として設定し、小川町にぎわい創出課の支援を得て学外授業を実施した。その後、ゼミ生主体で地域学習の成果を報告用パネルにまとめた。その過程で、ゼミ生は発表の練習を繰り返し、発表会当日には達成感を得ていた。これらの経験を振り返り、ゼミ生自身が「社会人基礎力」を高め、みずから成長したことを実感していた。社会人基礎力テストを実施し、ゼミ生の実感が客観的な数値としても確認された。ゼミナールでの学生主体による体験型地域学習が、学生の「社会人基礎力」を高めることに効果的であることが確認できたといえる。

城西短期大学は2026年3月末をもって歴史を閉じるが、このような活動は城西大学1・2年次のゼミナール活動に活かせるものと考えられる。大学生の就職活動開始時期は年々早まっているため、大学生のキャリア形成の観点からも、大学1・2年生の2年間にできるだけ「社会人基礎力」を高めることが求められる。1・2年生のゼミナール活動として地域連携活動発表会における報告をひとつの目標として学生主体で体験型地域学習をすることが、大学生の「社会人基礎力」のなかでとくに「チームで働く力」を高めていくうえで有効と考えられる。

参考文献

- 1) 一般財団法人大学・短期大学基準協会（2024）『学校法人城西大学 城西短期大学 機関別評価結果（令和6年3月8日）』
(https://www.jaca.or.jp/jaca_cms/wp-content/uploads/2024/03/12_R5_Josai_Junior_College.pdf)（2025年12月25日）
- 2) 経済産業省中小企業庁（2018）『「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」（人材力研究会）報告書（平成30年3月）』
(<https://www.chusho.meti.go.jp/koukai/kenkyukai/jinzaikyoka/2018/180314jinzaikyokakondankai.pdf>)
(2025年12月25日)
- 3) 城西短期大学（2021）『学生便覧2021』.
- 4) 村越純子（2021a）「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育——留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業——」『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要——』（1）, 28-38.
- 5) 村越純子（2021b）「オンライン授業における「基礎ゼミナールA」の教育実践報告」『城西短期大学紀要』38（1）, 13-32.
- 6) 村越純子（2022）「ビジネス総合学科におけるゼミナール教育の実践報告——社会人基礎力の向上にむけて——」『城西短期大学紀要』39（1）, 11-31.

付録1 村越ゼミナール「小川町歴史名所めぐり」の報告

私達、村越ゼミの2年生は、ゼミナール活動として小川町にある歴史名所を巡ることを企画しました。訪問地域として小川町を選択した理由は、小川町は城西大学生にとって身近な地で、歴史的名所がたくさんあるためです。

6月21日に小川町を訪れ、道の駅で紙漉き体験をした後、ボランティアガイドの方による町歩きを体験させていただきました。そして実際に歴史名所を見ながら、ゼミ生それぞれがとくに関心をもった場所の写真を撮影し、持ち寄った写真データの中からパネル用の写真を選びました。

パネルのレイアウトについては、ガイドの方からいただいた地図をヒントに、双六形式で歴史名所を順番に巡りながら、お客様が参加して楽しく学べるデザインにしました。また、クイズの解答をあえてAとBの2択にすることで、解説を丁寧にしてお客様により理解を深めてもらうことに重きを置きました。

これから、双六形式で、小川町の歴史名所について学んでいきましょう。

それでは写真①小川町駅から出発です！

はじめに、和紙についての問題です。

1. 小川町の伝統的な和紙の名前は何でしょう

A. 美濃紙 B. 細川紙

正解は、B. 細川紙

小川町を中心とする埼玉県西部地域では、「細川紙（ほそかわし）」という伝統的な和紙が作られています。この名前は、江戸時代にこの地域へ紙漉き技術が伝わった際、京都の細川家と関わりがあったことから名付けられたとされています。細川紙は、丈夫で軽く、筆運びもよいため、書道や版画、修復用紙など幅広く使われています。美濃紙（みのし）は、岐阜県的美濃地方（主に美濃市や関市周辺）で古くから生産されている伝統的な手漉き和紙の一つです。日本三大和紙のひとつとして知られ、歴史も非常に古く、奈良時代から続くと言われていています。

2. 和紙の主な原料として使われる植物は何でしょう

A. スギ B. コウゾ

正解は、B. コウゾ

「コウゾ（楮）」は和紙の主原料として古くから使われてきた植物です。その特徴は、繊維がとても長くて丈夫なこととです。そのため、紙にしたときに破れにくく、長持ちする質の高い和紙になります。収穫されたコウゾは、皮をむき、煮て柔らかくしたあとに繊維を細かくほぐして紙の原料になります。その他にも「ミツマタ」や「ガンピ」などが使われることもあります。小川町では特に「コウゾ」が中心です。なお、「ミツマタ（三桠）」は紙幣の原料として利用されており、「ガンピ（雁皮）」は古文書や写経用紙に使われます。

3. 紙漉き体験で大量に使われる「水」は、主にどんな役割をしているでしょう

A. 繊維を均一に広げるため B. 汚れや不純物を流すため

正解は、A. 繊維を均一に広げるため

和紙作りでは「水」がとても重要です。水に浮かべられたコウゾの繊維は、自然にばらけて動き、全体に均一に広がります。もし水の量が少ないと繊維が集まってかたまり、紙にムラが生じてしまいます。確かに不純物を取り除く工程でも水は使われますが、特に大量に用いられるのは「繊維をむらなく分散させるため」なのです。

4. 紙漉き体験で「簀桁（すげた）」という道具を使いますが、これは何に使うものでしょう

A. 紙の繊維をすくって、紙の形にするための道具 B. 紙を乾かすための棚

正解は、A. 紙の繊維をすくって、紙の形にするための道具

写真②「紙漉き体験」をご覧ください。作業台で職人さんと学生が手に持っているのが「簀桁（すげた）」です。簀桁は「簀（す）」と「桁（けた）」の二つの部分からできており、簀は竹や木で編んだ網状の部分、桁はそれを支える枠で、紙の大きさを決める役割も担っています。

簀桁は今日でも手漉き和紙に欠かせない道具で、工房によって形や大きさが異なり、竹や木材に加えてナイロン糸を用いる場合もあります。体験では、この簀桁を実際に使って繊維をすくい、一枚ずつ紙を漉くことができます。自分の手で漉いた和紙が形になる瞬間は、まさに伝統技術を実感できる体験です。

写真③「体験プログラム」をご覧ください。私たちが体験したのは、一番上にあるプログラム『模様入り・流し』で

す。こちらの背景はゼミ生が実際に紙漉きをし、模様付けした和紙作品を用いています。

5. 小川町の和紙が江戸時代に使われていた理由の一つは何でしょう

A. 丈夫で保存性が高かったから B. 文字がにじみにくい色つきの紙だったから

正解は、A. 丈夫で保存性が高かったから

小川町で作られている「細川紙（ほそかわし）」は、楮（こうぞ）の繊維から作られる手漉きの和紙で、たいへん丈夫で長持ちするのが特徴です。江戸時代には、この紙の耐久性・保存性の高さが評価され、奉書紙（ほうしょがみ）として、幕府や藩の公文書、帳簿、記録用紙などに使用されていました。また、軽くて扱いやすいため、庶民の間でも使われていた記録があります。

このような歴史的背景から、小川町の和紙は「実用品」としての価値が非常に高く、今でも文化財の修復や美術用途に活用されています。

写真⑥「和紙を使った雛人形」をご覧ください。

現在は和紙の丈夫さと保存性の高さを活かして、雛人形の着物にも使用されています。この雛人形は、写真⑤にもあります道の駅おがわまちにある伝統工芸施設「和紙のふるさと」にて展示されておりますので、訪れた際にはぜひご覧ください。

続いては、和紙体験学習センターについての問題です。写真⑦は、和紙体験学習センターの入り口前で撮った集合写真です。

6. 小川和紙にかかわるとされる史料が初めて確認できたのはどちらの時代でしょう

A. 江戸時代 B. 奈良時代

正解は、B. 奈良時代

小川和紙にかかわるとされる史料が初めて確認できたのは、奈良時代の宝亀（ほうき）5年・774年です。奈良の正倉院（しょうそういん）に保存されている正倉院文書には、宝亀5年・774年に武蔵国（むさしのくに）から「武蔵国紙（むさしのくにがみ）480張」が納められたという記録が残されており、これが小川和紙に関わる最初の史料とされます。この紙すきの技術を小川地域の人たちに伝えたのは、およそ1300年前に武蔵国に移り住んだ高麗人（こうらいじん）といわれています。また平安時代の『延喜式（えんぎしき）』には、武蔵野国と紙に関する史料が残されています。このように起源は古代にさかのぼると考えられておりますが、状況が正確に確認できるようになるのは、江戸時代の慶安・1640年代末になってからでした。

7. 和紙がユネスコ無形文化遺産に登録された年はどちらでしょう

A. 2008年 B. 2014年

正解は、B. 2014年

和紙がユネスコ無形文化遺産に登録されたのは2014年です。この時登録されたのは「石州半紙（せきしゅうばんし）」「本美濃紙（ほんみのし）」「細川紙」の三つの和紙技術で、日本の伝統的な手漉き和紙技術の保護と継承の重要性が国際的に認められました。

2008年にユネスコ無形文化遺産に登録されたものは、歌舞伎や人形浄瑠璃、能楽です。

8. 和紙の強度を高める伝統的な製紙工程はどちらでしょう

A. ねりの添加 B. 乾燥

正解は、A. ねりの添加

和紙の強度を高める工程として、「ねり」と呼ばれる粘剤（ねんざい）を加えることが重要です。ねりを加えることで原料の繊維が均一に分散し、繊維同士が絡みやすくなり、和紙が丈夫になります。主にねりの原料はトロロアオイが伝統的に使われてきました。

9. 原木の楮が紙になる量は全体のどれくらいでしょう

A. 40% B. 4%

正解は、B. 4%

原木を100%とした時、原木を蒸して皮をはぐと黒皮（くろかわ）が15%となり、黒皮を包丁で削りおとすと白皮（しろかわ）が9%、白皮を煮てさらすと4.5%となります。その後紙漉きの工程を終えると漉いた紙が4.4%となり、

最終的に漉きあげた紙を裁断すると4%となります。

写真⑧「楮の原木と作業場」をご覧ください。手前にある木が楮の原木で、奥にある建物が、体験学習センターの作業場となっています。作業場では、楮を和紙にするための一連の作業が行われていました。

写真⑨「和紙の折り鶴」をご覧ください。

10. この折り鶴はどちらのイベントで展示されたでしょう

A. 東京オリンピック B. 大阪万博

正解は、A. 東京オリンピック

この折り鶴は2021年に開催された東京オリンピックでゴルフ競技会場となった【霞ヶ関カントリー倶楽部】にて展示されたものです。約60×90cmの小川和紙が30枚使用されており、大変迫力のあるものとなっています。この折り鶴が展示されている展示室では「細川紙」の歴史について見学することができ、注目ポイントは、埼玉の和紙がグループ美術館や大英博物館の収蔵品、日本の仏像の修復で活用されているということだそうです。製法や和紙の原材料である植物繊維やその加工方法についても学ぶことができ、和紙が使われている作品も展示されています。

町歩きエリアに入りました！

写真⑩「庚申塔」をご覧ください。

11. 庚申塔に隠れている「三匹の動物」。次のうち実際に彫られているのはどちらでしょう

A. 鳥・猿・蛇 B. 牛・馬・虎

正解はA. 鳥・猿・蛇

庚申塔とは、干支という庚申の夜に宿に集まって夜を明かすという「庚申信仰」に基づいて作られた石造物です。庚申信仰では、人の体の中に「三尸（さんし）の虫」と呼ばれる虫がいて、60日に一度の庚申の日の夜、人が寝ている間に天に昇って、その人の悪事を神様に告げると考えられていました。そのため、庚申の夜は“寝ずに過ごす”という集まりが行われたり、庚申塔が建てられて信仰のしるしとされました。庚申塔には「三猿（見ざる・言わざる・聞かざる）」が彫られており、これは「悪いことを見ない・言わない・聞かない」という考えを表します。台座には鳥が二羽、庚申様の頭上にはとぐろを巻いた蛇がいます。

写真⑪「大谷石の石蔵」をご覧ください。

12. およそ100年前に建てられた大谷石の石蔵ですが、かつては何を保存していたでしょう

A. 米 B. 煙草

正解は、B. 煙草

大谷石の石蔵は、耐火性や断熱性に優れているため、火に弱く湿気を嫌う煙草の葉の保存に適していました。およそ100年前、まだ冷蔵設備や空調技術が発達していなかった時代には、こうした石蔵が貴重な保管施設として活躍しており、特に煙草の葉を乾燥させたり保管したりするために使われていました。ちなみに、米も湿気を避ける必要がありますが、木造の米蔵が多く用いられたため、石蔵で保存されることは比較的少なかったのです。

写真⑫「槻川」をご覧ください。

13. 槻川をイメージした道の駅グルメはどちらでしょう

A. ソフトクリーム B. うどん

正解は、A. ソフトクリーム

写真⑬「みたらしソフトクリーム」をご覧ください。

槻川は、小川町の和紙産業や人々の生活の源になっている川です。そんな槻川の流れをイメージしたのがこちらのソフトクリームです。一方、うどんは埼玉県全体では「煮ほうとう」「武蔵野うどん」などのうどんが名物になっています。

写真⑭「晴雲酒造外観」をご覧ください。

14. 晴雲酒造のシンボルであるレンガの煙突は、いつの時代に作られたでしょう

A. 明治時代 B. 大正時代

正解は、A. 明治時代

このレンガの煙突は晴雲酒造の創業時に造られたもので、お米を蒸すための熱源として石炭が使われていました。本

来の高さは約18メートルありましたが、平成11年に約半分の高さに縮め、下の部分もくり抜いたため、中から上を見上げられるようになっていきます。小川町には、古くから秩父山系（ちちぶさんけい）を水源とする良質な水で作られる酒造りが有名で、なかでも3つの酒蔵が代表的です。それは、松岡醸造と武蔵鶴酒造、そして、晴雲酒造です。

写真⑬「帳簿台」は、晴雲酒造の内装で、現在で言う会計事務が行われる場所であり、当時のものが再現されています。当時はそろばんが使用されていました。

写真⑳「羅漢像」をご覧ください。

15. 中城跡にある羅漢像は、「無事帰る」という言葉にちなんで、ある物を持っています。それは何でしょう

A. 草履 B. 蛙

正解は、B. 蛙

日本では昔から、旅のお守りや安全祈願の意味を込めて、「蛙＝帰る」という語呂合わせがよく使われてきました。そのことから、この羅漢像には、蛙を持った石像があります。

写真⑮「中城跡・櫓（やぐら）」、写真⑯「羅漢」をご覧ください。

中城跡には櫓があります。櫓の前には47体の羅漢像がありましたが、現在は46体となっています。

写真⑰「仙覚律師顕彰碑」、写真⑱「顕彰碑を見る様子」をご覧ください。

16. 中城跡にある仙覚律師顕彰碑（せんがくりっしけんしょうひ）ですが、仙覚が小川町で遂げた偉業は何でしょう

A. 万葉集注釈を著書した B. 新しい城を築いた

正解はA. 万葉集注釈を著書した

中城跡にある「仙覚律師顕彰碑」は、鎌倉時代の僧侶であり、学者でもあった仙覚律師の功績を称えた記念碑です。万葉集とは、奈良時代に編纂（へんさん）された、全20巻から成る日本最古の和歌集です。しかし「万葉集」は言葉や背景が難解で理解しにくいものでした。仙覚律師はそれらを丁寧に調べ、言葉の意味や歌の背景に注釈を加え、学術的にまとめることで、後（のち）の時代の人々が万葉集を読み解けるようにしたのです。

こちらの写真⑲「万葉集」は、町中の花壇付近などに設置されている万葉集の解説パネルです。こちらのパネルには、但馬皇女（たじまのひめみこ）が詠んだ「人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る」という和歌が書かれています。ぜひ小川町に訪れた際は、このような解説パネルに目を向けてみてください。

17. 小川町は2つの企業の発祥地としても有名です。その2つの企業名は何でしょう

A. ベルク・ファミリーマート B. しまむら・ヤオコー

正解は、B. しまむら・ヤオコー

写真㉒「八百幸商店のイラスト」、写真㉓「島村呉服店のイラスト」をご覧ください。どちらも個人商店から始まり、やがて、しまむらは株式会社島村呉服店、ヤオコーは有限会社八百幸商店としてそれぞれ設立されました。写真㉔は、島村呉服店があった場所の現在の様子です。Aのベルク・ファミリーマートは埼玉県発祥ですが、ベルクは秩父市、ファミリーマートは狭山市が発祥地となっています。

18. かつて存在した「比企銀行」は、現在の何銀行のもとになったでしょう

A. 武蔵野銀行 B. 埼玉りそな銀行

正解は、B. 埼玉りそな銀行

現在の埼玉りそな銀行は、数多くの銀行との合併を経て誕生しました。

比企銀行は1927年に第八十五銀行へ合併され、その後1943年に他の3つの銀行と統合されて埼玉銀行が誕生しました。埼玉銀行はさらに、あさひ銀行を経て、現在の埼玉りそな銀行となりました。

写真㉕「比企銀行」をご覧ください。

こちらは旧比企銀行の建物です。現在は横浜国立大学院出身の3名によって改修されており、カフェの営業やワークショップなどイベントが行われ、地域住民の交流の場として活用されています。

写真㉖「二葉楼看板」をご覧ください。

19. 看板の文字を書いたのは誰でしょう

A. 勝海舟 B. 山岡鉄舟

正解は、B. 山岡鉄舟

1748年、商業の拠点として宿場町としても賑わっていた小川町に、料亭「二葉楼」は創業しました。幕末には志士、勝海舟や江戸城の無血開城を実現させた山岡鉄舟も訪れたと伝えられています。こちらは実際に掲げられている看板です。この文字は書の達人としても名高い山岡鉄舟が二葉楼のために書き下ろしたものです。

写真⑳「二葉本店」をご覧ください。

20. 平成16年に二葉楼が登録されたものはどちらでしょう

A. 国指定有形文化財 B. ユネスコ無形文化遺産

正解は、A. 国指定有形文化財

時代と共に歩んできた木造二階建てで、数寄屋造り（すきやづくり）の二葉楼は、平成16年に国の登録有形文化財に指定されました。チャペルを併設した料亭であるため、和と洋が融合した歴史的ロマンを感じる贅沢な空間で結婚式を行うことができます。

写真㉑むすびめをご覧ください。ゴールのむすびめに到着しました！

むすびめは、小川町駅正面にある観光案内所・移住サポートセンターです。小川町に関するパンフレットや雑貨も置いておりますので、ぜひお立ち寄りください。

以上で発表を終わります。ぜひ皆さん、小川町に行く際は、ご参考にしてください。

この度は村越ゼミナールによる小川町歴史名所めぐりの説明会にご参加くださり、誠にありがとうございました。

〈参考資料〉

- ・小川町産業観光課編集・発行（新田文子監修）「和紙のふるさと－小川和紙の世界」2016年。
- ・小川町公式サイト「小川和紙」
〈<https://www.town.ogawa.saitama.jp/kanko/washinofurusato/ogawawashi/index.html>〉
- ・埼玉観光サポートデスク「小川町文化探訪」
〈<https://saitama-supportdesk.com/ja/courses/post-29056/>〉
- ・一般社団法人東松山市観光協会「仙覚律師の顕彰碑（小川町）」
〈<https://higashimatsuyama-kanko.com/sengakurisshi/>〉
- ・株式会社しまむら公式サイト「沿革」〈<https://www.shimamura.gr.jp/company/history/>〉
- ・株式会社ヤオコー公式サイト「沿革・歴史」〈<https://www.yaoko-net.com/corporate/history.html>〉
- ・りそなホールディングス公式サイト「りそなグループのあゆみ」
〈<https://www.resona-gr.co.jp/holdings/about/outline/history/index.html>〉
- ・二葉楼公式サイト「～創業270年の歴史～国指定登録有形文化財 二葉楼」
〈<https://futabaro.official-wedding.jp/>〉
- ・NPOあかりえ NESTo「大谷石造りの建物の歴史」
〈<https://nesto.work/nesto/%E5%BB%BA%E7%89%A9%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2/>〉

付録2 地域連携活動発表会後のゼミ生によるリフレクション

レポート① 木戸口小桃

地域連携活動発表会にむけた活動についてまず振り返りをします。私はゼミ代として司会進行や分担作業の割り振りなどを含むゼミナール活動のベース作りに取り組み、ゼミナール活動全体の統括の仕事をしました。そしてとくにパネルのデザイン作成に取り組みました。

ゼミナール活動のベース作りとしては、まずクイズ問題を作るための分担決めを行いました。ゼミ生がスムーズに活動に取り組めるよう2人1組で活動してもらうことによって、サポートや助け合いの面から連携が取りやすくなるように配慮しました。これは良い「働きかけ力」の発揮であったと思っています。そして夏休み中の課題としてゼミ生各自にクイズ問題の作成に取り組んでもらい、全員が集まる活動では私が司会進行を務め、パネルで使用する写真についての相談や、ゼミ生が作成した解説文の確認や校正作業を行いました。このようにパネルが完成するまで私はゼミ代として率先して仕事に取り組みました。

私は昨年度の地域連携活動発表会用パネル「川越歴史文化遺産巡り」のデザインを担当したため、デザイン作成のための要領は掴めていました。そこで「昨年より良いものにするにはどうしたらいいか」ということを意識して取り組みました。今年のパネルデザインではゼミ生の和紙作品をうまく取り入れたり、目を引くために取り入れた「小川町双六」の文字にワードアートを使用して見学した「槻川」をイメージしたものにしたり、工夫を凝らしました。結果的に昨年のパネルよりも洗練されたデザインになりました。このような経験から、私は社会人基礎力の12の能力要素にある「創造力」を磨くことができたと考えています。

以上のように私は、己の創造性を活かしてより良いパネルデザインを作成することと、ゼミ代として活動全体をスムーズに進めるために、計画的に準備をすることやゼミ生に働きかけることを頑張りました。この経験から私は、自分の「創造力」「計画力」「働きかけ力」に気づくことができ、自信がもてるようになりました。このように自信につながる自分の能力を具体的に意識できるようになったことが良い成長だと思いました。

今後の課題は「発信力」と「柔軟性」の向上です。ゼミ代として集団活動での司会進行をしたときに、積極的に活動に取り組もうとするゼミ生との話し合いは上手にできても、全員に声掛けをして発言の機会をつくることはできませんでした。このような反省点を踏まえ、「発信力」と「柔軟性」を今よりさらに伸ばして、今後またチームをまとめる立場になった際には、チームの仲間の様子や状況を見ながら、適宜柔軟に活動の仕方を考えられるようになりたいです。

最後に地域連携活動発表会を終えた感想として、ゼミ生それぞれが分担した作業を高水準でこなし、前向きに取り組んでくれたおかげで、完成度の高いパネルやプレゼン用の読み原稿を完成することができたことを本当に嬉しく思っています。発表会当日も、足を止めてくださった方々に楽しんでいただける発表となり、アンケートでも高評価の声を聞くことができ達成感を得ました。支えてくれた村越先生や、力を合わせて活動してくれたゼミ生の皆の存在に心から感謝しています。このような実りのある経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

レポート② 秋山舜

村越ゼミナールの地域連携活動では、「小川町歴史名所めぐり」をテーマに発表を行いました。私は副ゼミ長としてゼミ長の補佐役を務め、打ち合わせの進行やメンバーの意見の調整を担当しました。発表内容を検討する際には、小川町の歴史的な魅力をどのように整理し、来場者に分かりやすく伝えるかを意識しました。名所の紹介では、ただ情報を並べるのではなく、歴史的背景や現地の雰囲気が伝わるように資料の構成を工夫しました。こうした試行錯誤を通して、「発信力」を意識した情報整理と表現に力を入れました。

また、話し合いの中では、必要に応じてサポート役に回り、チーム全体の動きを見ながら進行を支える場面も多くなりました。メンバーの意見をまとめ、作業が円滑に進むように動くことで、「状況把握力」も発揮できたと感じています。

今回の活動を振り返ると、これまでよりも積極的に行動できるようになったことが大きな成長だと感じています。以前の私は、周囲の意見を待つてしまうことがありましたが、副ゼミ長としての責任もあり、自分から話題を投げかけたり、メンバーのアイデアを引き出したりと、主体的に行動する場面が増えました。その結果、「主体性」や「働きかけ

力」を伸ばすきっかけになりました。

さらに、本番に向けた練習計画の作成や時間配分の調整など、準備段階では「計画力」や「実行力」も求められました。練習を重ねる中で、メンバー同士が改善点を共有し、資料を繰り返し見直すことで、ゼミ全体の雰囲気が協力的で前向きなものになりました。チームとして一つの成果をつくり上げる経験を通して、自分自身の行動の幅が広がったと実感しています。

課題として強く感じたのが「傾聴力」の不足です。話し合いの中で、相手の説明を聞きながら必要な情報を整理することがうまくいかず、内容が頭の中で混乱してしまう場面がありました。副ゼミ長として発言のまとめ役になる場面も多かったため、この弱点は自分の中で特に大きな課題だと受け止めています。今後は、相手の意見を落ち着いて最後まで聞き、その上で要点をつかむ練習を重ねたいと考えています。メモの取り方や、聞きながら頭の中で構造化する方法も学び、話し合いの中でも冷静に対応できる力を身につけたいです。

今回の活動を通して得た気づきは、城西大学編入後のゼミ活動だけでなく、社会に出た際にも必ず生きてくると思います。特に「傾聴力」は、どの職場でも必要とされる力であり、人と協力しながら仕事を進める上で欠かせません。副ゼミ長としての経験を基に、社会人基礎力のさらなる向上を目指し、今後も自分の成長につながる行動を積み重ねていきたいです。

レポート③ 伊林綾音

地域連携活動発表会までの準備や本番のプレゼンをとおして、私が特に頑張ったことは、発表当日の臨機応変な接客です。双六を最初から最後まで体験してくださる方には練習通りに発表し、時間があまり無いという方には2～3問だけ体験していただくなど、来場者の状況に合わせて柔軟に対応することができました。また、クイズだけでなく、発表後に質問をしてくださる方や、元々小川町について詳しい方々との交流も深めることができました。この経験から、自分のコミュニケーション能力の向上に加え、知らなかった小川町の歴史や文化、現状についての知識を深めることができ、とても良い学びの機会となりました。本番のプレゼンを振り返ると、社会人基礎力の12の能力要素のうち、特に「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」の4つを高めることができたと感じています。

次に、自分が成長したと思える点は「主体性」です。2024年の夏休み中に実施されたゼミナール活動のときには実家に帰省していたため、オンラインで参加しました。そこには2年の先輩という存在がいらっしやり、オンライン参加ということもあって、クイズの問題作成について積極的に発言することができず、自分の主体性の不足を感じていました。しかし今年度は自分たちが中心となって作り上げていく立場だったため、より積極的に意見を出していくことができました。そのためゼミナール活動を通して社会人基礎力の12の能力要素のうち、「主体性」をとくに高めることができたと思っています。

反省点は、文章を読む能力にあまり成長が見られなかったことです。私は中学校時代演劇部に所属していた経験から、自分の滑舌を過信しすぎていました。実際は練習でも噛んでしまうことが多く、本番では緊張も重なり、大きい声を出すことを意識するあまり滑舌が乱れてしまう場面も多くありました。今後は、演劇部の経験を活かし、発声と滑舌の両方を意識して相手が聞き取りやすい話し方を身につけ、発表に限らず、話し方の質をより高めていきたいです。

この2年間のゼミナール活動を通じて、上記のように多くの経験や知識を培うとともに、自分自身の課題や改善点を見出すことができました。ゼミナール活動をとおして高めることのできた社会人基礎力を、社会に出てから存分に活かしていきたいです。

レポート④ 尾上優来

今回の地域連携活動発表会を通して、私はさまざまな学びと成長を感じることができました。特に私は他のゼミ生と異なり、小川町での学外授業に参加することができなかつたため、その分、発表会本番ではどのようにすればお客さまに興味を持って聞いていただけるのかについて考え、工夫を重ねて取り組みました。具体的には、表情の使い方や声のトーン、話すスピードなどを意識しながら練習を重ねました。練習の段階では、ただ原稿を読むだけでなく、相手に「伝わる」話し方を目指して、何度も声に出して確認しました。本番当日は、練習よりもゆっくりと、聞き取りやすいテンポで、楽しそうに話すことを意識しました。また、お客さまから頂いたヒントをその場で活かし、次のお客さまに

は豆知識のような形で紹介するなど、臨機応変な対応を心がけました。結果として、お客さまからも笑顔や反応をいただくことが多く、学外授業に参加できなかった私なりに、やりがいと達成感を得ることができました。

そして、この経験を通して、私は「文章を読む力」が大きく育まれたと感じています。発表練習を始めた当初は、読めない漢字があったり、緊張して嘔んでしまったりすることが多かったのですが、家で原稿を繰り返し読み、漢字の意味を調べたり、声の抑揚を意識したりしながら練習を重ねることで、徐々にスムーズに読めるようになりました。発表当日は落ち着いて原稿を読むことができ、聞き手にも伝わりやすい発表ができたと思います。また、この経験は他の授業のプレゼンテーションにも活かすことができ、以前よりも自信を持って人前で話すことができるようになりました。人前で話すことに対する抵抗感が少なくなり、表現力や伝達力の面で自分の成長を実感しています。

一方で、今回の発表を通して自分の課題も見つかりました。発表時間が長くなるにつれて疲れが出てしまい、嘔んでしまう回数が増え、同じ行を繰り返し読んでしまうことがありました。集中力が途切れると小さなミスが重なりやすいことを実感したので、これからは発表するための持久力を高めたいと思っています。今後は、より多くの文章を読む練習を重ね、長時間でも安定して発表できるように努力したいです。また、声の出し方や姿勢、目線なども工夫し、どのような場面でも堂々と発表できるように準備を重ねていきたいと考えています。将来、社会人として人前で話す機会が増えた際にも、今回の経験を活かして、どこに出しても恥ずかしくないような伝え方ができる人間になりたいと考えています。

地域連携活動発表会は、単なる発表の場ではなく、自分の表現力や伝える力を見つめ直す貴重な機会となりました。今後も今回の経験を糧に、さらに成長していけるよう努力を続けていきたいです。

レポート⑤ 笠原えりか

地域連携活動発表会にむけ、村越ゼミナールで自分が特に頑張ったことは、自分の生まれ育った小川町の良さを村越ゼミナールの皆さんに知ってもらうために、自分が知っている小川町について積極的に教えたことです。小川町は和紙で有名な町だと思われがちですが、しまむらやオコーなど大手企業の発祥地でもあります。しかし、このことを知っている人は稀であるため、わたしはこの点をクイズにしたいと思いました。そこでそれらの企業の歴史をどのように知ってもらうか、小川町で有名な物をどのようにまとめるか、そしていかに人が興味を持ってくれるクイズを作成するかということに時間をかけました。個人的にはひっかけ問題を作成したつもりでしたが、発表当日には正解する人がたくさんいたため、少し悔しいような複雑な気持ちになりました。ですが、多くの人が楽しいと思えるクイズを作成できたのでよかったです。

自分が成長したと思えたことは、小川町の魅力を改めて見つけることができたことと、発表会当日に小川町の魅力をしっかり伝えることができたことです。観光ガイドの方と小川町を散策したことで、小川町の新魅力をたくさん知ることができました。私は城西短期大学のディプロマ・ポリシー（社会人基礎力）の12の能力要素のうち、「課題発見力」と「状況把握力」が向上したと思っています。「課題発見力」としては、パネル作成のときに新たに資料が必要だと気づいたときにはそのことをきちんと提案したことなどです。「状況把握力」としては、地元民だからこそ知っていることについて、状況に応じて仲間にわかりやすく説明することができたことです。

今回の反省点は、社会人基礎力の12の能力要素のうち「発信力」が私に足りないと思いました。村越ゼミナールの地域連携活動発表会を聞いてくれた方たちのなかには小川町に詳しいお客様がいました。小川町は3つの酒造が代表的ですが、その酒造の酒の味の特徴について質問されたとき、私はそれらの特徴を答えることができませんでした。しかし、質問をしてくださったお客様は3つの酒造の酒の味を全て知っていたため、その特徴を教えてください、非常に勉強になりました。私は、これから「発信力」を高めるためには、もっといろいろなことを学ぶ姿勢が大事だと気づきました。城西大学に編入してからも城西短期大学のゼミナール活動で身につけた能力を活かして、いろいろなことを学ぶことで自身の「発信力」をさらに向上させていきたいです。